

(A) ハンセン病問題と歴史

画像 番号	画像見本	タイトル／内容
A001		<p>身延河原の掘建て小屋 1900（明治33）年ごろ</p> <p>近代初期の日本では、各地の神社・仏閣・温泉などに、家を出ざるをえなくなり放浪する患者が多く集まった。山梨県の身延山周辺には、故郷を追われた患者が日蓮宗への帰依による病気快癒と参詣客からの寄付を求めて大勢集まった。</p>
A002		<p>印がつけられた患者の家 1940（昭和15）年</p> <p>すべての患者を療養所に收容する方針が打ち出された後は、患者を拘束して療養所に入れることも行われた。熊本県の本妙寺部落で、患者を含む人びとを一斉に警官らが強制收容した際、患者がいると見なされた家には、扉に大きく印がつけられた。</p>
A003		<p>本妙寺部落の強制收容 ① 1940（昭和15）年</p> <p>熊本市西部に位置する本妙寺には、ハンセン病患者が信仰による治癒と参詣客からの喜捨を求めて集住していた。九州療養所（現・菊池恵楓園）が設立されると、たびたび本妙寺周辺の患者の收容が行われた。写真は、7月4日朝の強制收容にともなう診察の様子。この收容で部落は解散させられた。</p>
A004		<p>本妙寺部落の強制收容 ② 1940（昭和15）年</p> <p>熊本市西部に位置する本妙寺には、ハンセン病患者が信仰による治癒と参詣客からの喜捨を求めて集住していた。九州療養所（現・菊池恵楓園）が設立されると、たびたび本妙寺周辺の患者の收容が行われた。写真は、7月4日朝の強制收容の様子。この收容で部落は解散させられた。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A005		<p>本妙寺部落の強制収容 ③ 1940 (昭和15) 年</p> <p>熊本市西部に位置する本妙寺には、ハンセン病患者が信仰による治癒と参詣客からの喜捨を目当てに集住していた。九州療養所（現・菊池恵楓園）が設立されると、たびたび本妙寺周辺の患者の収容が行われた。写真は、7月4日朝の強制収容の様子。この収容で部落は解散させられた。</p>
A006		<p>本妙寺部落の強制収容 ④ 1940 (昭和15) 年</p> <p>熊本市西部に位置する本妙寺には、ハンセン病患者が信仰による治癒と参詣客からの喜捨を目当てに集住していた。九州療養所（現・菊池恵楓園）が設立されると、たびたび本妙寺周辺の患者の収容が行われた。写真は、7月4日朝の強制収容の様子。この収容で部落は解散させられた。</p>
A007		<p>本妙寺部落の強制収容 ⑤ 1940 (昭和15) 年</p> <p>熊本市西部に位置する本妙寺には、ハンセン病患者が信仰による治癒と参詣客からの喜捨を目当てに集住していた。九州療養所（現・菊池恵楓園）が設立されると、たびたび本妙寺周辺の患者の収容が行われた。写真は、7月4日朝の強制収容の様子。この収容で部落は解散させられた。</p>
A008		<p>癩予防デーのポスター 1935 (昭和10) 年</p> <p>1920年ごろからすべての患者を隔離する方向に政策が転換され、人びとのハンセン病への偏見や差別を推進力に、各県は患者のいない状態を競う無癩県運動をくりひろげた。国が中心となって設立した癩予防協会の活動もこれを後押しした。このポスターは、同協会が主催する、6月25日の癩予防デーを宣伝するもの。その趣旨は「癩を根絶」することにあった。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A009		<p>全生病院（現 多磨全生園）創立当初の木製の正門 1909（明治42）年</p> <p>1907年の「癩予防ニ関スル件」公布後、全国を5区域に区分し、各区の道府県による公立療養所が各地につくられた。全生病院は、関東1府6県及び、新潟、愛知、静岡、山梨、長野（第一区）の連合府県立療養所として東京府に設立された。</p>
A010		<p>患者送致用の車両「お召し列車」で東村山駅へ 全生病院（現 多磨全生園） 大正期</p> <p>患者が療養所へ送られるときは、一般の乗客が乗る車両には同乗させてもらえず、患者専用の特別車両に乗せられた。この車両は「お召し列車」と呼ばれた。写真は、全生病院に収容される患者や付き添いの療養所職員たち。</p>
A011		<p>全生病院の収容門 全生病院（現 多磨全生園） 大正期</p> <p>患者は職員らが入り出す正門とは別に設けられた収容門から敷地内に入った。写真は収容直後の様子。患者が持ってきた荷物を点検する職員も写っている。</p>
A012		<p>光田健輔（1876－1964）</p> <p>1909（明治42）年、全生病院医長に着任。1914（大正3）年に院長となり、1931（昭和6）年には最初の国立療養所、長島愛生園の園長となった。ハンセン病の医療と隔離収容とは一体であるという考えを最後まで捨てず、日本の強制隔離政策を主導する位置にあり続けた。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A013		<p>土塁と堀 全生病院（現 多磨全生園） 1915～16（大正4～5）年</p> <p>全生病院の中は、患者が生活や治療をする患者地区と、職員がいる職員地区に分かれていた。そのうち患者地区は、周囲を土塁と堀で囲んでいた。これは患者が住んでいる場所とそうでない場所を分けるためだけでなく、患者の「逃走」と、外から人が入ってくることを防ぐためのものであった。</p>
A014		<p>ヒイラギの垣根 多磨全生園 1953年撮影</p> <p>全生病院（現 多磨全生園）の敷地の外周に、大正末～昭和初期以降設置された。1960（昭和35）年に低く刈り込んだ頃には、約3mの高さがあった。患者の逃走防止とともに、外からの視界を遮る目的があった。</p>
A015		<p>療養所貸与の着物 多磨全生園</p> <p>消毒風呂から上がると、お仕着せのそろいの着物を与えられた。</p>
A016		<p>園内通用券 北部保養院（現 松丘保養園）</p> <p>患者の逃走を防ぐなどの目的で、それぞれの療養所内でしか通用しない「お金」が使われていた。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A017	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>園内通用券 星塚敬愛園</p> <p>患者の逃走を防ぐなどの目的で、それぞれの療養所内では通用しない「お金」が使われていた。</p>
A018	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>園内通用券 大島青松園</p> <p>患者の逃走を防ぐなどの目的で、それぞれの療養所内では通用しない「お金」が使われていた。</p>
A019	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>園内通用券 宮古南静園</p> <p>患者の逃走を防ぐなどの目的で、それぞれの療養所内では通用しない「お金」が使われていた。</p>
A020	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>園内通用券 多磨全生園</p> <p>患者の逃走を防ぐなどの目的で、それぞれの療養所内では通用しない「お金」が使われていた。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A021	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>食事模型</p> <p>麦に少し米が混じるような灰色のめしに、ふすま味噌がわずかに入った実の少ない薄い汁物。おかずは煮豆や佃煮、香の物、良いときで塩鮭などであったという。</p>
A022	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>わっか下駄 多磨全生園</p> <p>足の指を失ったり、変形したりした患者が使えるよう、サンダルのようにはける下駄が考案された。</p>
A023	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>包帯 全生病院（現 多磨全生園）</p> <p>治療の際に使われた包帯。柄のあるものは、使い古した着物などで作られたもの。</p>
A024	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>義足 全生病院(現 多磨全生園)</p> <p>足を切断した患者が使ったブリキの筒に木片をつけただけの義足。切断した足の先を包帯で締めつけ、筒の細さに合わせていた。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像 番号	画像見本	タイトル／内容
A025	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>義足を履く患者 全生病院(現 多磨全生園) 大正後期か</p>
A026	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>大風子油と注射器 九州療養所(現 菊池恵楓園)・栗生楽泉園 1930年代か</p> <p>インド原産の大風子(たいふうし・だいふうし)という木の実をしぼった油。化学療法ができるまでは、大風子油が唯一の治療薬と考えられていた。</p>
A027	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>大風子油注射 全生病院(現 多磨全生園)</p> <p>日ごとの治療時には、大風子油の注射を受けるために多くの患者が治療場に集まった。固まりやすくねばり気のある油を筋肉に注射したため激痛を伴い、化膿しやすかった。</p>
A028	 <p>国立ハンセン病資料館</p>	<p>患者作業－治療助手 全生病院(現 多磨全生園)</p> <p>医師や看護婦が少ない時代の療養所では、毎日の包帯交換などは患者が助手として手伝っていた。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A029		<p>患者作業－病棟看護 全生病院（現 多磨全生園）</p> <p>病棟では、外科手術や、結核や精神疾患、その他ハンセン病以外の病気を患った人が治療を受けた。しかし、当時の療養所は医師も看護婦も不足していたため、病棟で治療をしている患者の世話は症状の軽い患者が行った。昼夜を問わないため、体調を悪化させる原因にもなった。</p>
A030		<p>重病室 多磨全生園</p> <p>昔は、木造平屋の病棟が患者の手でいくつも建てられ、結核や精神疾患、その他ハンセン病以外の病気を患った人が治療を受けた。</p>
A031		<p>患者作業－盲人の洗濯作業 全生病院（現 多磨全生園） 大正期～昭和初期</p> <p>患者作業は療養所の維持・運営を目的として行われた。作業賃もわずかに支払われていたが、十分な休息や医療を受けることが難しいなかで患者たちはけがを負うなどして障害を重くしていった。写真は汚れた包帯やガーゼを樽に入れ、交差させた棒で洗う盲人患者。</p>
A032		<p>患者作業－包帯の巻き直し 全生病院（現 多磨全生園）</p> <p>けがの治療には、消毒薬をつけて包帯を巻くぐらいしか方法がなかったため、包帯は毎日大量に使用された。洗濯し、干し、巻き直す作業は患者が行った。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像 番号	画像見本	タイトル／内容
A033		<p>患者作業－洗濯場 全生病院（現 多磨全生園） 1937（昭和12）年か</p> <p>昔の療養所では経費削減のため、使用した包帯やガーゼを洗濯して繰り返し使用した。洗濯や包帯巻き、ガーゼ伸ばしも患者が仕事として行った。</p>
A034		<p>患者作業－野菜を収穫する農産部 全生病院（現 多磨全生園）</p> <p>患者作業によって、園内の農園で野菜・根菜・果物・穀物などがつくられた。作物は療養所によって買い取られ、給食の材料になった。</p>
A035		<p>患者作業－道路の舗装作業 全生病院（現 多磨全生園） 1929（昭和4）年</p> <p>多磨全生園周辺は粘土質の地盤のため、雨が降ると地面がひどくぬかるんだ。患者たちは杖をつく盲人や義足の人の歩行を助けようと、治療棟に向かう道などを大きな敷石で舗装した。</p>
A036		<p>患者作業－養豚 全生病院（現 多磨全生園） 1935（昭和10）年</p> <p>患者作業により育てられた豚は外に出荷されて患者の貴重な収入になった。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A037		<p>患者作業－教師① 全生病院（現 多磨全生園） 1910(明治43)年</p> <p>子どもの患者もいたため、「学校」が必要だった。当初は大人の患者が教師役を務め、寺子屋式の授業を行った。</p>
A038		<p>患者作業－教師② 全生病院（現 多磨全生園）</p> <p>子どもの患者もいたため、「学校」が必要だった。当初は大人の患者が教師役を務め、寺子屋式の授業を行った。</p>
A039		<p>全生学園と子どもたち 全生病院（現 多磨全生園） 1931（昭和6）年ごろ</p> <p>1931（昭和6）年には全生病院内に校舎が完成し、全生学園と名付けられた。1953（昭和28）年には東村山町内にある公立の小中学校の分教室となり、資格を有する教員が派遣された。</p>
A040		<p>寂しい運動会 多磨全生園 1970（昭和45）年 [撮影／趙根在]</p> <p>新発生患者の減少につれて、子どもの入所者の数も減っていった。全校生徒6人での運動会。本校の運動会には、参加できなかった。</p> <p>※画像を掲載する際は [撮影／趙根在]とクレジットを入れてください。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A041		<p>望ヶ丘の子どもたち 長島愛生園 1930年代～1940年代</p> <p>発病すれば、子どもも大人と同じように収容された。長島愛生園では、子どもたちの生活の場として、大人が生活する一般舎と離れた場所に少年寮・少女寮を建設し、その地を「望ヶ丘」と名付けた。学齢期の子どもたちは隣接する療養所内の学校に通った。</p>
A042		<p>岡山県立邑久高等学校新良田教室 長島愛生園 1955（昭和30）年か</p> <p>入所者が通うことのできた唯一の高校。1953（昭和28）年のらい予防法闘争の成果として、1955年、長島愛生園に設置された。卒業生は307名、その約7割の225名が社会復帰した。</p>
A043		<p>旧少年少女舎（百合舎） 多磨全生園 1955年ごろ</p> <p>家族と離れて療養所にやってきた子どもたちは15歳になるまで少年舎や少女舎で暮らし、多いときには30人以上が共同生活をしていた。少年舎は若竹舎・桐舎、少女舎は百合舎・椿舎などの名前がつけられた寮舎が使われ、大人の患者が寮父や寮母をつとめた。</p>
A044		<p>山吹舎 多磨全生園 1961（昭和36）年 〔撮影／趙根在〕</p> <p>1928（昭和3）年に建てられた男子独身軽症者寮。1つの舎は12畳半の部屋を1列に4つ並べた長屋作りで、12畳半に8人が定員の雑居部屋であった。</p> <p>※画像を掲載する際は [撮影／趙根在]とクレジットを入れてください。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A045		<p>図書館 多磨全生園 1976（昭和51）年 〔撮影／趙根在〕</p> <p>患者が利用する図書館として、1936（昭和11）年に建てられた。現在は入所者が通う理・美容室となっている。</p> <p>※画像を掲載する際は 〔撮影／趙根在〕とクレジットを入れてください。</p>
A046		<p>望郷の丘 全生病院（現 多磨全生園） 1931（昭和6）年ごろ</p> <p>患者の増加により手狭になった療養所を拡張するため、全生病院は1922（大正11）年から1923（大正12）年にかけて南側と東側に敷地を拡げた。このときに掘り起こされた土の残りや切り株などを利用して、1925（大正14）年に築山が作られた。築山はいつしか「望郷の丘」または「望郷台」とよばれるようになり、患者たちが故郷の方角を眺めて想いをはせる大切な場所になった。</p>
A047		<p>患者歌舞伎 全生病院（現 多磨全生園） 1928（昭和3）年</p> <p>療養所では患者の慰安と逃走防止を目的に、さまざまな行事が催された。特に患者歌舞伎は、近隣住民も招待し、多くの人が公演に集まった。</p>
A048		<p>監房 全生病院（現 多磨全生園） 1915～16（大正4～5）年ごろ</p> <p>1916(大正5)年に「癩予防ニ関スル件」の施行規則が一部改定され、懲戒検束規定が盛り込まれた。療養所の外に無断で出る「逃走」や畑の作物を盗むなどした患者が裁判を受けることもなく収監された。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A049		<p>「重監房」の跡 栗生楽泉園 2006（平成18）年撮影</p> <p>長島愛生園で起きた患者による抗議行動（長島事件）を契機に、所長たちの間に園内の監禁室以外の施設を求める声が高まった。1938（昭和13）年に「特別病室」（通称「重監房」）が設置され、各療養所で特に反抗的とされた患者などが送り込まれた。1947（昭和22）年に廃止されるまでに93人が収監され、23人が死亡したと伝えられる。</p>
A050		<p>墓標代わりに小松を植えた墓地 全生病院（現 多磨全生園） 1922（大正11）年ごろ</p> <p>全生病院が開院した当初は、亡くなった患者は土葬をし、墓標代わりに小松を植えた。</p>
A051		<p>旧納骨堂 全生病院（現 多磨全生園） 1935(昭和10)年</p> <p>「せめて死後は安らかに眠りたい」との患者たちの思いによって各療養所に納骨堂がつけられたが、その背景にはほとんどの家族が遺骨を引き取らない事情もあった。全生病院では、患者や職員、宗教団体などの寄付により患者作業で1935年に納骨堂をつくりあげた。</p>
A052		<p>納骨堂内 多磨全生園 1960年代か [撮影／趙根在]</p> <p>死後も家族の引き取り手のない骨壺が並ぶ。</p> <p>※画像を掲載する際は[撮影／趙根在]とクレジットを入れてください。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A053		<p>壊滅した外島保養院 外島保養院（現 邑久光明園） 1934（昭和9）年</p> <p>室戸台風の直撃で外島保養院は壊滅し、犠牲者196人を出した（うち患者173人）。風水害の危険性が低い場所への移転計画が、候補地の住民による反対で頓挫した結果起きた大惨事だった。</p>
A054		<p>プロミンの安ぷル</p> <p>らい菌への効果をもつ初の化学療法薬。日本では1947（昭和22）年より治験が開始された。著しい治療効果をあげたが、有効成分の濃度が低いために耐性菌の出現を招くなどの課題もあった。</p>
A055		<p>プロミン注射 栗生楽泉園 1950（昭和25）年ごろ</p> <p>プロミンの登場によって、ハンセン病は治すことができるようになった。患者たちの間に大きな希望が生まれた。</p>
A056		<p>参議院裏の座り込み 1953（昭和28）年</p> <p>戦後、日本国憲法と化学療法を手にした入所者は、療養生活の改善や治る時代に見合った法の改正を求めて行動に立ち上がった。1952（昭和27）年～1953（昭和28）年にかけて行われた、らい予防法闘争では、デモや座り込み、患者作業の放棄やハンストなどが行われた。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像 番号	画像見本	タイトル／内容
A057		<p>園内のデモ行進 長島愛生園 1953（昭和28）年</p> <p>らい予防法改正当時、治る時代にふさわしい法改正を訴えて行われた園内のデモ行進の様子。</p>
A058		<p>尊厳回復の碑 多磨全生園 2013(平成25)年撮影</p> <p>墮胎された胎児を弔うため、2006（平成18）年に建てられた。療養所では患者が子どもを産み育てることは許されず、妊娠した女性患者は墮胎手術を受けさせられた。ハンセン病国賠訴訟の判決後に実施された検証会議の調査では、全国の療養所で100体以上の胎児標本の存在が明らかとなり、多磨全生園の関係では36体が確認された。</p>
A059		<p>控訴断念要求 2001（平成13）年</p> <p>ハンセン病政策による人権侵害の事実認定と謝罪・補償を求めて、入所者らは「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」を起こした。療養所に入所しなくても治療が可能になった後も、国が療養所への入所を基本とする方針を変えなかったことは、憲法違反だとする判決を得た。失った家族や生活、将来への希望が取り戻せるはずはなかったが、国による謝罪とそれをふまえた対策（補償金や名誉回復など）につながるとともに、ハンセン病に対する社会の認識が変化していくきっかけにもなった。</p>
A060		<p>ハンセン病家族訴訟の熊本地裁前での勝訴発表 2019（令和元）年</p> <p>国の隔離政策のもとで、社会にいた患者・回復者の家族もまた差別・偏見にさらされた。さらに家族関係の形成も阻害された。その被害に対する謝罪と補償を求めて2016年に回復者の家族561人が原告となってはじまった裁判は、一審判決で原告が勝訴した。国は控訴を断念して判決が確定した。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A061		<p>ハンセン病家族訴訟判決報告集会 2019(令和元)年</p> <p>原告勝訴の判決を受けて東京都内で開かれた報告集会。国に控訴断念を訴えようと、原告団・弁護団・支援者がメッセージを送った。</p>
A062		<p>「舌読」 1979年 [撮影／田中栄（長島愛生園）]</p> <p>手指の欠損・変形や麻痺のため、失明しても指で点字がたどれない入所者は、感覚が残る唇や舌先で点字を読んだ。</p> <p>※画像を掲載する際は[撮影／田中栄（長島愛生園）]とクレジットを入れてください。</p>
A063		<p>北條 民雄（1914 - 1937）</p> <p>1934（昭和9）年に全生病院に入院。1935（昭和10）年に初めて「間木老人」を川端康成に送り講評と激励を受け、『文学界』に掲載された。1936（昭和11）年、「最初の一夜」（川端康成により「いのちの初夜」と改題されて発表）が文学界賞を受賞した。その後も数多くの作品を『中央公論』や『改造』、『文芸春秋』などに発表した。1937（昭和12）年、腸結核のため23歳の若さで亡くなった。</p>
A064		<p>「青い鳥楽団」の演奏風景 長島愛生園 1974（昭和49）年</p> <p>長島愛生園の盲人らによって、1953（昭和28）年に結成されたハーモニカバンド。ハンセン病と視覚障害という二重の偏見・差別を打破しようと活動を始めた。園内だけでなく全国で演奏会を成功させた。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A065	 <p>A black and white portrait of Arne Hansen, an elderly man with a full white beard and mustache, wearing a dark suit jacket over a light-colored shirt. The word 'sample' is overlaid in large white letters across the center of the image. At the bottom right, there is a small logo for the National Hansen's Disease Museum.</p>	<p>A. ハンセン (1841-1912)</p> <p>ノルウェーの医学者。1873（明治6）年にらい菌を発見し、1897年の第1回国際癩会議においてその対策には隔離が最適であると主張し、各国の隔離政策に影響を与えた。</p>
A066	 <p>A microscopic image showing numerous acid-fast bacilli (red) and other cellular structures (blue) against a light background. The word 'sample' is overlaid in large white letters across the center. A small logo for the National Hansen's Disease Museum is visible at the bottom right.</p>	<p>らい菌</p>
A067	 <p>A photograph showing the back of a person with numerous small, reddish, raised skin lesions (nodules) characteristic of Hansen's disease. The person is wearing a white shirt. The word 'sample' is overlaid in large white letters across the center. A small logo for the National Hansen's Disease Museum is visible at the bottom right.</p>	<p>皮疹の症例</p> <p>ハンセン病に感染した人が発病した場合、最初の症状は皮疹と知覚麻痺である。</p>
A068	 <p>A photograph of WHO Comba blister packs for tuberculosis treatment. There are four blister packs in different colors: pink, orange, green, and blue. A box of the medication is visible in the background. The word 'sample' is overlaid in large white letters across the center. A small logo for the National Hansen's Disease Museum is visible at the bottom right.</p>	<p>WHO配布治療薬</p> <p>ブリスター・パックと呼ばれる、多剤併用療法の薬。無料で配布されている。多菌型、少菌型、それぞれの大人用・子ども用の計4種類があり、どのような人でも自宅治療できるように、パック裏には日を追って薬を服用する指示などが印刷されている。</p>

(A) ハンセン病問題と歴史

画像番号	画像見本	タイトル／内容
A069		<p>後遺症の人体図</p> <p>回復者はさまざまな後遺症をもっている。これらは主に化学療法以前のものであり、後遺症が残っていても感染源となることはない。</p> <p>顔や手足に変形を残すと、人前に出ることに消極的になりやすい。また、知覚麻痺や運動麻痺があると動作が思うようにならず、創傷に気づかずにきずを悪化させることも多い。そのため、社会生活に困難をきたすことも少なくない。</p>
A070		<p>自助具（スプーン・フォーク） 多磨全生園</p> <p>手指が不自由な患者・回復者が、手に装着して使う。握りやすくするために柄を太くしたものや、手に巻いた包帯に差しして使うものもあった。</p>
A071		<p>ボタンかけ 多磨全生園</p> <p>指先の感覚のない人や、手が屈曲・拘縮している人が使う道具。ボタンかけの輪の方をボタン穴に入れて、ボタンをひっかけて反対側にひっぱり出す。</p>
A072		<p>湯呑みカバー</p> <p>皮膚の感覚のない人は、お茶などが入った湯呑み茶碗を長時間持つことで手のひらにやけどをすることが多い。その予防のため、湯呑み茶碗にウレタンスポンジなどを巻くことがある。写真のものは水道管などにつかわれる塩化ビニルのパイプにすべり止めの溝をつけたもの。</p>